

---

# 迷宮街の死神

膨れ女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷宮街の死神

### 【Zコード】

Z9037Z

### 【作者名】

膨れ女

### 【あらすじ】

きつい、汚い、危険。あと臭い。これが迷宮探索の現実だ。新人探索者の四割が一ヶ月以内に死亡・失踪する過酷な迷宮街において、探索歴四年のベテランのオレは探索者達から『死神』という不名誉なあだ名を付けられ、恐れられていた。誰もパーティを組んでくれないぼっちなオレが、ある日一人の少女と出会う。

【活動報告に9話までの用語集があります。ネタバレ有り】

## プロローグ（前書き）

自分が読みたい小説を書いてみました。

## プロローグ

### 【アルサラインの地下迷宮 第一層】

薦に覆われた薄暗い部屋の中に男は一人立っていた。

部屋からは一本の通路が延びており、男の隣に置かれているランタンの明かりによつて、通路にまで仄かに光が差し込んでいる。男は慎重な面持ちで、片方の通路の先をじつと見据えている。

そうして幾ばくか時間がたつた後に、変化は訪れた。

男の視線の先にある通路の空間が、ぐにゃり、と曲がる。瞬間、何もないはずの空間から、三つの白い影が出現した。白い影は次第に四足歩行の獣に形を変えてゆく。

出来上がつた三体の獣は、男を食い殺さんがために、隊列を組んで部屋の中へと駆けてゆく。

お次は白い犬つこる三匹か

左手に魔力を集める。

『フォビア、我を恐れよ』

『恐怖』の魔法を三体の白い犬つこる、《ホワイトファング》に唱えた。

白い犬つころの一體が何かに怯えるように足を止めたが、残りの一體は効果がなかつたのか部屋の中に我先にと押し寄せてくる。男は右手に持つていた大薙刀を構え、部屋の入り口で獸を待ち構えた。

今だ！

男は体格よりも大きい大薙刀を振りかぶる。大薙刀の刃の部分が、一體の『ホワイトファング』の頭と体を分離し、吹っ飛んだ『ホワイトファング』の頭が通路の壁に赤いしみをつくつた。

男は大薙刀と共に体を回転させながら、柄についてる金属部分である石突を、今まさに男の頸動脈を噛み切ろうとしていたもう一體の『ホワイトファング』の脳天に突きつける。

頭蓋骨が碎ける鈍い音が鳴り、辺り一面にさびた鉄のような血の匂いが充満した。

鈍い音を聞いてようやく我に返つた最後の『ホワイトファング』は、目の前で展開される一方的な殺戮に身を固めた。野生の本能が逃げろと警告している。

しかし、我に返つた白い犬つころが、逃げようとしたのか、襲いかかろうとしたのかは、男には知る機会はなかつた。なぜなら、男が発した一筋の『電撃』によつて、最後の『ホワイトファング』は真つ黒に焦げた塊になつてしまつたからだ。

きつい

汚い

危険

これが迷宮探索者の仕事のすべてだと思う。あと臭いを入れてもいいかな。

オレは白い犬たちの皮と歯を死骸から剥ぎ取り、撤退の準備をする。剥ぎ取り箇所以外の部位は、そのうち迷宮に吸収されてしまうので、その場に放置しておいた。

この三匹分の皮と歯の買い取り価格は、大体金貨一枚。およそ十日分の生活費である。四半刻以下の時間で稼げる金額としては、破格とも言える。ただし、それが自分の命を賭けるに値する金額かといえば、正直怪しい。死んだら元も子もないのだ。オレは訳あって、一人で狩っているからこの価格なだけで、普通の六人パーティなら六分の一で、一日分の生活費にもならない。

そもそも、実質四半刻以下の時間で稼げるといえども、そこにあるまでの準備が長い。武器の手入れから含めた準備期間としては半日相当かかる。いわゆる探索暦四年のベテランのオレがこの程度の収入なのだから、大半の探索者にとって迷宮探索は割りに合

わないはずだ。

とはいっても、今ガイリアあたりでドンパチやってる戦争屋たちに比べれば理想の職場かもしれない。 基本的には人を殺さずに済むし、成果に見合った報酬も出る。金さえ溜まれば、引退もできる。 ただ、人を殺さずに済むというのは理想論で、時には同業者を殺めなければ、迷宮街で無事に生きてゆけないのも事実、のはずだ。

現にオレは同業者を殺めている。

それこそが、オレがぼっちで迷宮にもぐっている理由の一因なのだろう。 決してコミコニケーション能力がないとか、一匹狼を気取りたいとか、そういう理由ではない、と思つ。 たぶん、な！

そう。 オレは、「計十人の同業者を殺した」ということで、この迷宮街【聖都アルサライ】における迷宮探索者コミコニティの中で、《死神》、という不名誉なあだ名をつけられていた。 《死神》って。

## 1 五十人中二十人

照りつける太陽は、迷宮の暗がりに慣れ切った目にはいくらかまぶし過ぎた。

フード付きのローブを被つて、大薙刀を背中に担ぎ、迷宮街を闊歩する。迷宮から出た時刻は昼の刻を一刻ほど過ぎた頃合いだった。

「今日は、一層を攻略するぜ！」  
「そうね、そろそろ力も付いてきた頃かしら」  
「目指せ一日一金貨だなっ」

うつ向いて歩いているオレの前方から、六人組のパーティーらしき集団が、楽しげに会話をしながら歩いてきた。

彼らの目は希望に満ち、未知の世界と冒険に心は震え、物語の中の英雄に胸を馳せている。

長くはないな、と思った。

五十人中二十人。

一ヶ月のうちに迷宮街に新規参入する探索者のうち、一ヶ月以内に迷宮街で死亡もしくは失踪する人数である。残る三十人の中、二十人は一年を待たず、死亡もしくは引退し、探索者として一年以上生計を立てられるのは、十人がやつとだ。

目の前の若者たち六人は、迷宮に潜りはじめて一週間程度だろう。彼らの目には恐れがなく、彼らには猜疑心が欠け、彼らの胸には

慎重さが足りない。

迷宮で生き残るのに必要なものが全て欠けている。故に五十人  
の内の二十人になる。

そんなことを考えていると、向こうの六人がこちらに気づく。  
彼らの会話から笑いが消え、沈黙が訪れた。

参ったなあ

潜つて一週間の新人達も、自分のことは認識しているようだ。  
オレ＝『死神』という認識が蔓延している現実に対し自嘲げに笑  
い、うつ向きながら彼らを横切る。オレは少しの間、彼らの無事  
を心の中で祈つた。

ちなみに潜つて一週間の彼らが知っていたのは決して偶然ではな  
い。彼、すなわち『死神』は迷宮探索者の間で出回つている迷宮  
街危険人物リストで貫録の危険人物第一位を獲得しているのだ。  
ぼっちは彼には今のところ知る由も無いが。

アルサライ迷宮管理機構。 通称、【機関】。

迷宮探索者の登録、迷宮における獲得物品の買取、トレーニング  
施設の運営、住宅・宿泊施設の運営、武具屋などの店舗の運営、冠  
婚葬祭など迷宮探索に関わる事業を一手に引き受ける機関である。

オレは今、【機関】の本部に来ている。

というのも、今日の迷宮探索の成果を金に替えるためだ。

基本的に本部は、物品の買取と迷宮探索者登録の一いつの事務を請け負っている。

迷宮探索者登録が本部で行われるのはともかく、物品の買取が本部で行われる理由は、迷宮探索者の生存確認のため、らしい。例えば、迷宮で手に入れた物を毎日売っていた人間が、ある日突然なくなるということがあつたら、十中八九そいつは死んでいるか、トラブルに巻き込まれている。

基本的に探索者には不干渉の立場を取つていて【機関】としては、探索者の内情を探るのはタブーとされている。よつて最も効率的に探索者の管理を行うには、冒険者の買取の記録を付けるのが一番といつわけだ。

生存確認以外にも、買取の内容によつて、探索者がいつ誰と迷宮のどの層でどれだけの間潜つていたかがわかるため、探索者の能力や交友関係、行動パターンを知ることが買取の記録だけで可能となる。

よつて、迷宮探索者の登録、管理と同じ場所で買取を行つのはある意味当然といえるだろつ。

「え、ええ。か、確認させていただきます。《ホワイトファング》

の牙六つ、か、皮四つ、《オーク》の牙四つ、《ブルーゼラチン》の核九つ、《ボーパルラビット》の爪一つで、よ、よろしいですか？」

恐れの籠った声で、買取担当である四十過ぎの中年男性が問いかけてくる。おそらく、《ホワイトファング》の牙と皮の数が同じじゃないのが後ろめたいのだろう。

少し考えて、返事をする。

「《ホワイトファング》の皮は、状態の如何に関わらず買取ではなかつたのか？ 確かにこの一つは黒こげだが…」

オレの言葉に、中年男の買い取り担当の目が泳ぎ始めた。

「も、申し訳ありません。せ、先日、ほ、本部の方針で皮類は、じ、状態によっては買取不可ということが、け、決定しまして…」

まあ、皮は衣服などに利用されるだろうから、黒こげではまずいのだろう。無論、黒こげでも使い道がないわけではないだろうが、この前百個近く黒こげの《ホワイトファング》の皮を持ち込んだのが効いたようだ。

迷宮の物品の相場は変動しやすいから、じつにひとつもあるだろう。

仕方がないから、このまま交渉を進めよう。

「こへりだ

「は、はい… その一つの皮も、は、半額で買い取らせていただけます！ よつて全部で金貨九と銀貨十五となります！ これで勘

弁してください！」

何か発言の意図を勘違いされているような気がするが、当初提示されるはずの金額よりも損はしていないのでこのまま交渉を進めてしまおう。銀貨十六枚で金貨一枚なので、今回の探索で大体金貨十枚程度の手に入ったことになる。

「あ、ありがとうございました！」

何か言いたそうな買取担当を横目に、金を受け取る。オレは齧したつもりはないからね？

これ以上ここに用はないので、今日は早めに酒でも飲みに行くかーと考えながら、本部の入り口へと向かう。オレが入り口前にあるエントランスホールに差し掛かったとき、ちょうど一人の新人が本部に足を踏み入れようとしていた。

赤毛の短髪、整った顔立ちに、気品が感じられる凛とした佇まいと、高級そうな鎧に身を纏い、煌びやかな宝飾のある剣を携えて、辺りを見回している。年は十五、十六だろうか、身長は五尺程度でオレよりも一回り小さい。

またか

どうみても、五十人中の二十人に入りそうな少女がそこにいた。

「嬢ちゃん、迷宮街は初めてだろ?」

「ボクに何の用ですか? ナンパならもう聞に合つてますけど」

いきなり出鼻を挫かれた。流石に嬢ちゃんはまずかったか。

「のよつに先行きが不安そうな新人探索者に声をかけるのは、何もこの少女が初めてではない。親切心、老婆心の類で、一ヶ月も迷宮街で生きられそうにない探索者に、発作的に声をかけてしまうことがこれまで幾度かあった。その海のよつに深い親切心がこの少女には、スケベ心だと解釈されてしまつたらしい。スケベ心なんて少ししかないからな。」

「い、いや、そうではなくて、だな。迷宮探索者志望の君に忠告しみつと思つてだな」

「なんですか?」

怪訝そうな田でこつちを見ている。

「ううう田で見られるのはよつちゅうだが、ナンパの類だと思われるのは癪だ。」

紳士的かつスマートさを心がけて、少女に忠告する。

「「」のまま探索者になつても、君は一ヶ月「」の迷宮街で無事には過せないだろ?」

今まで同じように忠告して、死んでいった探索者たちの姿が脳裏によみがえる。

オレが忠告したといひで、彼らの死の運命は大して変わらなかつた。

そして、恐らく今回も、この少女が行き着く先は変わらないだろう。

この行為が血口満足であることは重々認識しているのだ。

「……犯罪予告？」

なぜか変な方向に解釈されてしまった。

どうしてこうなつた。

あわてて、修正を入れる。

「そ、そんなつもりはないぞ。オレが言いたいのは、君は迷宮に潜るには力不足ということだ」

だから潜るな、とは言えない。

十五、十六の少女が一人で迷宮街を訪れ、迷宮に潜るつと決意しているのだ。

潜らなきやいけない、彼女なりの理由があるのだろう。

最初からわかつていたことだが、こんな忠告は無駄なのだ。忠告を受け入れて、じゃあ探索者やめます、みたいな人間はハナから

この街には来ない。死のうと思つてこの迷宮街に訪れる人間はない。探索者としての素質があるうがなかろうが、迷宮街を訪れる人間は必ず迷宮に潜る。その結果、死んだり生き残つたりするだけだ。

これ以上話しても、この少女の死を知つたときの悲しみが増すだけだと思い、この場を立ち去ろうとした。だが、少女は真っ直ぐオレの目を見据えて、こう言い放つた。

「じゃあ、どうすればいいですか？」

少女は何の含みも無いような透き通る目をしていた。吸い込まれるような茶色の瞳から、オレは目を逸らすことができなかつた。彼女の疑問も最もだ。偉そうに忠告するからには、オレは何か答えを持つてなきやいけなかつたのかもしれない。

でも、答えはない。迷宮街にいる以上、絶対的な安全はどこにもない。

どうすればいいのか、それが分かれば迷宮街で死ぬ人間などないのだ。

オレは苦し紛れに言葉を紡ぎだす。

「……迷宮に潜らなきやいい。迷宮に潜る以上、常に死の危険がそばにある。どんなに万全をつくしても、必ず死はどこかにある。決して死なない迷宮の潜り方なんて存在しない。……だが……いや。そうだな……。もし、金銭が許すのなら、可能な限り迷宮に潜る前に、トレーニング施設でトレーニングに励むべきだ。そうすること

で死ぬ確率を極限まで薄めることは可能……かもしれない。……でも……それでも、死ぬときには死ぬ

ひどいアドバイスがあつたものだ。

でもこれが、四年間オレが見てきた迷宮街の真実だ。

少女は困ったような顔をした後、少し考えて、笑いながら答えた。  
「それならボクはこれから一ヶ月迷宮に行かずにトレーニング施設にだけ行きます。

これで貴方の死刑宣告も大外れですね」

彼女はオレの言葉を聞き、何かを感じ入ったようで、オレに笑顔を振りまいてくる。

彼女の笑顔が、すさんだ迷宮街の生活を送っていたオレには少しばかり眩し過ぎる。

突き放さなくては、と思つた。

でないと彼女は、長く生きられない。

「あと、もう一つ忠告しようか」

「なんですか？」

今度は笑顔でこちらを見ている。

これからオレは彼女を突き放すのだ。少女の笑顔が、少し辛い。

「あまり人の言葉を信用しないほうがいい。この迷宮街で人を信じたら、食い物にされる。たしづめ君なら慰み者にされるか、売り飛ばされるかがオチだ。そして」

「で、でも、貴方の忠告は」

少女はオレの言わんとしていることが分かるのか、オレの弁護をしようとし始めた。

やはり、この少女は迷宮街には向いていない。迷宮街で生活するには純粋すぎる。

オレは少女の言葉をさえきつて、じつ言い放つた。

「そして、オレは迷宮街で最も信用してはいけない人間だ。」

『死神』と呼ばれている

そう続けて、オレはその場を逃げるよつと去つた。

このあと、オレは酒場で一人手酌をしながら、最後の『死神』の部分はないわー、と悶々とすることになる。

今年で二十一になる男が言つ台詞ではない、恥ずかしすぎぬ。しかも年下の女の子に向かつて。

誰か、オレを殺してくれ。  
こりしてくれー。

いやいや、ちょっと待て。

オレは事実を言つたまでだ。

悪いのは『死神』なんていうあだ名だ。

こんなあだ名をつけた奴が悪いんだ。

よしそいつを殺そう。

こりそう。

酒場の隅のほうで一人酒をあおりながら、「こりしてしてくれー」とか「ころそう」とか呟いていた『死神』の傍には、誰も近づかなかつたという。

### 3 少女エリー

「迷宮街危険人物リスト」彼らとはパーティーを組んではいけない！

第1位 トシアキ、通称『死神』

危険度

+

出会つたら、死刑宣告されないことを祈れ！

特徴：見たまま死神スタイル

血で汚れたフードの付いたローブを被り、死神の大鎌らしき武器を持っている

（伝説の数々）

- ・6人パーティーで彼と迷宮に潜つたら、5人が死んで彼1人だけが迷宮の『三層』から戻ってきた。
- ・「そんな危険なわけがない」といつて彼と組んだベテラン5人が一日後死体で戻ってきた。
- ・迷宮街に初めてきた新人が、「一ヶ月後に死ぬ」と死刑宣告を受けた
- ・新人探索者の1／3が死刑宣告経験者。その的中率の高さから、そもそも死にやすい「女、子どもほど危ない」
- ・買取担当者が彼に脅されるのは日常茶飯事
- ・彼が俯いて笑うのを聞いた日に、迷宮で怪我をする確率が150%。一度怪我をして、さらに怪我をするのが50%の意味。
- ・彼が探索した辺りに、『ホワイトファング』が百体以上真っ黒焦げになつて倒れていた
- ・四層極悪モンスターの『スライム』が彼と出会つて数分で死んだ
- ・彼が一日に稼ぐ金貨の量は平均20枚。多い日は100枚も。

- ・迷宮における死亡者は一ヶ月平均30人、うち約20人が彼による何らかの被害者。

「やっぱり、これって昼間に会った人だよね…」

宿屋の部屋で、赤毛の少女エリーはため息をつく。手元には、探索初心者マニコアル。迷宮街危険人物リストのページにある写真をじっと見ていた。

このマニコアルは先ほど食事を取っていた食堂で、一人の先輩探索者からいただいたものだ。

内容は突っ込みどころ満載で、正直いろいろと疑わしい部分もあるけれど。

（特に「何らか」の被害者って何ですか！？　「何らか」って！）

昼間に『死神』さんに死刑宣告された事実を、先輩探索者たちに告げると一同に同情をされた。

このマニコアルを見ても、あの人がいかに有名だったのかがわかる。

血の付いた武器を背にフードを被っている姿は、不審者そのものだつたし、目立つのは確かだ。

「悪い人には思えなかつたけど…」

『死神』さんの忠告通り、ボクは明日から訓練所デビューハーことになった。

女性だけのパーティを組んでいる先輩探索者たちのグループ「アマゾネス」に勧誘を受け、将来的にパーティに参加する代わりに、特訓をしてもらひことが決まったのだ。

「一ヶ月特訓したい、といつたら驚かれたけど（普通特訓は二、三日らしいよ！）

『死神』さんの死刑宣告の話をしたら、あっせりと承してもらえた。

どうやら、「アマゾネス」の過去のメンバーにも死刑宣告をされた人がいたらしく、しかも本当にちょうど一ヶ月後に迷宮で罠にかかりて亡くなってしまったらしい。それからというもの、『死神』さんは「アマゾネス」のグループの中で、恐怖の対象になつていふようだった。

「早く強くならないと…」

「じらん、ヒベッドに横になつて、エリーは呟く。  
今は無き故郷に、思いを馳せる。

追つ手が来るのはいつになるだらうか。

それまでに、自分の身を守り、生き抜く手段を得なくてはならない。

（そのためにボクはこの惡々しい聖都に来たんだ！）

手持ちが残りわずかになつて、財布を見てため息をつく。  
この都市に来るまでに、大半を使つてしまつた。

この額だけで、一ヶ月も生活してゆけるのか、わからない。

「お金がこんなに大切ななんて、知らなかつたよ…」

こぞとなつたら、宝飾の付いた剣を売つて生活費の足しにしなくてはならない。

自分と王家を繋ぐ証もあるから、そう簡単には手放したくはないけど、背に腹はかえられない。

目が潤んで、目の前の天井がぼやけてくる。

ここにのどに涙いてばつかだ。

泣いた分だけ、自分がどんどん弱くなる気がするので、必死に涙をこらえる。

「ぐすり……明日は早いんだ。早く寝よ」

エリザベッタ＝ナ＝ティン。

ガイアニア半島の今は亡き国家、【イピロニア】の第三王女。

それが彼女の正体である。

4 二大宗教（前書き）

世界観の説明回です

## ユタ教とムハマド教。

かたや東側諸国の国教、かたや西側諸国の国教。この二大宗教における最大の不幸は、同一の聖地を持っていることだつた。

そして、この不幸が本格的にガイリア半島に襲いかかつたきつけは、今から三十年前に聖地で起きた 事件。

### 【聖都アルサライ】における迷宮の出現

原因は三十年間、多くの学者、知識人、占い師、呪術師もろもろが、あーだこーだ言い合つてゐるが、未だ共通認識は作られていない。

ただ 事件 が起きる舞台としては、聖地はどこよりも相応しかつたのかもしれない。と、宗教家は言つてゐたりする。

そもそも、【聖都アルサライ】は地理的には東側諸国に属していした。しかし、聖都は宗教的な理由から東側諸国との国にも属さず、政治的干渉を受けない中立都市として存在していた。

よつて長年にわたり、【聖都アルサライ】は東側諸国からのユタ教の信者の巡礼だけでなく、西側諸国のムハマド教の巡礼も等しく受け入れる国際都市として栄え続けていた。

三十年前、迷宮が出現するまでは。

迷宮が出現して一月も立たないうちに、迷宮から異形の怪物たちが出現。怪物たちは未知の術を用い、無差別に市民と巡礼者を攻撃し、多くの死を聖都にもたらした。

半年後、迷宮の怪物により、自らの国の安全までも脅かされ始めていると認識した東側諸国は、連合軍を聖都に派遣し、多くの犠牲を出ししながらも怪物を迷宮内部に押しとどめることに成功。その過程で聖都における東側諸国の影響力は増していった。

問題はここから。

怪物が操る未知の術、魔法、が歴史の大きな転換点を生み出すことになる。多くの犠牲と研究と一部の人たちの妄想によつて、魔法に関して次の三つの事実（？）が判明した。ちなみに妄想の占める割合は六割以上。ほぼ妄想じゃねーか。

怪物は迷宮が生み出す魔力によつて生まれ、体内に蓄えた魔力を用いて魔法を使つていること（全て妄想）

魔力が充满している聖都（妄想）においては、人間も魔法を利用することが可能（事実！）であること

怪物が死ぬと多くの魔力は怪物の死骸とともに消失するが、怪物の死骸の一部に残りの魔力が濃縮され（ここまで妄想）、消失せずにマジックアイテムとして残ること（事実！）

このマジックアイテムはどれも、既存の技術の枠組みを超えた性能を持つていた。

一部の希少なマジックアイテムは同質量の金よりも高い額で取引され、マジックアイテムは東側諸国に莫大な利益を与えることになる。

まさに 魔力革命 であった。と、一部の人たちは言っている。

この事態が、西側諸国にとつては面白いはずがない。

彼らにとつてみれば、聖都における迷宮の出現と魔力の存在は、自國のムhammad教の神の奇跡に他ならない。故に、ムhammad教の神がもたらした利益を異教徒ユダ教の集団が手にしている、つてことになる。

迷宮が出現してから一年後、西側諸国の大國【フランス王国】のムhammad教会は【聖地アルサライ】の奪還を宣言。

ムhammad教正規軍、通称クルキアーダが聖都に向けて進軍を開始した。

クルキアーダ戦争 の始まりである。

そしてこの戦争で最も被害を受けたのが、東側諸国と西側諸国の中継地点。ガイリア半島であった。

大義名分を持つた人間ほど恐ろしい生き物はいないと言つたのは誰だつただろうか。

ムハマド教正規軍クルキアータがガイリア半島で行つた所業は、まさに悲惨。

殺戮、略奪、強姦、人間が行えるありとあらゆる非道が行われ、難民と戦争孤児が、東側諸国にあふれ返つた。

以後三十年間、迷宮の怪物によつて流された血のおよそ百倍がガイリア半島に流れ、その結果多くの小国が滅亡した。その中には赤毛の少女エリーの祖国【イピロニア】も含まれている。

それでも、迷宮街には、彼女の身の上を真に同情するものは恐らくいないだろう。彼女は戦争による多くの被害者のうちのたつた一人に過ぎないのだ。

現在、迷宮街となつた聖都における迷宮探索者の大半が、この戦争の何らかの被害者であった。

そして、勿論といふかなんといふか、我らが『死神』トシアキも例に漏れず、クルキアータ戦争の被害者だつた。

トシアキが物心付いたときには親は既に無く、多くの戦争孤児に囲まれて生活していた。

もう月末か

線香の香りが街中を埋め尽くす。この香りに慣れてしまったのは、いつだったか。

大通りに面した広場で行われている【機関】主催の迷宮街合同葬儀を横目に、オレは時間が経つのを待っていた。

今日の『死神』は相変わらずフード付きローブは被っているが、いつものように大薙刀を携えてはいない。迷宮に潜る予定はなかった。

手元の懐中時計が、昼の刻を告げようとしている。そろそろだな、と思った。

「トシアキさん。お久しううなあ」

白髪混じりの老女が、ゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

「一ヶ月ぶりですね。ミリア先生  
オレは深くお辞儀をした。

「ご無事で何よりですじや。いくら稼いでも死んでもうたら元も子もねえもん。トシアキさんはあの子らの希望じやけえ」

「彼らは元気ですか」

「いや、もう元気いっぱいで手に負えんあつさまじや。あの子らを

見てると若に頃のウパさんとトシニアキさんを思い出してしまつた。  
ほんま、時間が経つのは早いの。むづ三年になるかいの」

「ええ…」

オレは顔をうつむける。

「ウパさんも、ローザさんも、タクさんも、ジヨセフさんもハナさんもワシなんかよりも先に逝つてしまつて、ワシはほんまに何をしたいのかいの…」

初老の女性の顔が歪む。

「トシニアキさんは、あの子達にとつて必要な人です。なかなかできる」とではありません

「トシニアキさんも、もう十分じや。みんな逝つてしまつたのに頑張る」とはありへん。それなら解放されてもええ頃合にじや

「そんなことはできません。…ウパたちの死の責任は私にあるのですから。それに私が稼がずして、誰が孤児院を支えられるんですか。迷宮への出稼ぎは、私で最後にしますよ」

そう言って金貨の詰まつた袋を渡す。

「一円分です。重いので気を付けてください。…それにまだ戦争は続いています。不幸になる子は増えることはあっても、減ることはあつません。そのためにもこれは必要なことです」

「ほんまにう。ほんまにトシニアキさんは、【安らぎの家】の誇りですじや。こんなに長い間、こんな大金を稼いだ子は前にも後にもあらせん。トシニアキさんなら、くたばることもあるまいと信じておる。それに、あの世の皆が見守つてくださつておるでよ」

トシニアキ先生はオレの手を握る。子供の頃から知つてゐる懐かし

い温かさだった。

オレの唯一の故郷、【安らぎの家】。

元修道女であるミリア先生と、腕自慢の大人數人が二十年近く前に設立した戦争孤児のための孤児院である。

当初の【安らぎの家】では、ミリア先生が一人で子供の世話を担当し、孤児院の運営費用は腕自慢による迷宮街での出稼ぎで賄われていた。そんな中で幸運にもオレを含む子どもたちは、愛情を与えて育つことができた。

だが孤児のために出稼ぎにきた心優しい腕自慢を、迷宮が飲み込むのに長い年月はかかるなかつた。

そして、資金難によつて孤児院の存続が危ぶまれた際に、愛情を受けて育つた子供たちが迷宮街へ出稼ぎに行くのは自然な流れであった。

最初に迷宮街に出稼ぎににいった子供たちは、オレよりも十近くも年上だつた。半年も立たず、次の子供たちが出稼ぎに行くことになつた。そして五度目の出稼ぎ隊として、オレたちが迷宮街に足を踏み入れたのは、もう四年前になる。

「ミコア先生、そろそろお時間でしょう」

ミリア先生は長年にわたつて月の最後に、孤児院の運営費を手に入れるために迷宮街にきていた。迷宮街へ物資を運ぶ、護衛付きの行商団と共に。

物資供給の行商団がお馴染みの商談をまとめるのは、そこまで

時間はかかるない。 よつて、このように会つて早々切り上げてしまつのが常だつた。

迷宮街は大金を持つて長居する場所でもないか

名残惜しさを隠して、オレは一円の別れを告げる。

「もう、そんな時間が。 ではトシニアキさん、お体に気を付けてください。 あと、あの子らもトシニアキさんに会つたがつておるで。 暫が許すなら一度戻つてきんわい」

「ええ。 ミコア先生も大事に」

去つてゆく先生の背中が小さく見える。  
線香の匂いが目に染みた。

5 先生（後書き）

ヒロイーン（老女）

ミコア先生を送り出したあと、オレは腹が減つてゐるのに気付き、行きつけの定食屋に足を伸ばした。ボリューム満点な料理がリーズナブルな値段で提供され、むさい探索者にはおあつらえ向きの店である。

「イラツシャーリ」

定食屋に入ると、東部訛りの店員がやつてきた。

「アノ、すみませんが、アイセキ、ヨロシーカ?」

アイセキ? あいせき、愛惜、哀惜…えーと、ああ相席か。

周りを見渡すと、混雑して満席に近いのがわかつた。そういうえば、安息日の真つ昼間だった、と混雑の理由を推測する。

普段は迷宮を出て諸々を終えたあと、大体昼の刻から一刻ほど回つた頃に来ているので、こんなに混んでいる定食屋を見るのは久しぶりだつた。

「ええ、いいですよ。日替わり定食で」

あんまり混雑してるのは苦手だが、もうすでにこの定食屋で食つ氣分だつたので仕方ない。いつものよつと日替わり定食を頼む。ボリューム満点で銅貨4枚だから、非常に安くて気に入つてゐる。

「アイヤー。分かったヨー。席こつちネー」

店員に誘導され、席に向かう。

「あ

「え

そこには、赤毛の少女がいた。

オレが今一番合わせたくない顔だった。

しばらく立ち尽くし、目で少女と会話を試みる。  
どうしてここにいるんだ。この店は、年頃の女の子が一人でく  
るような店じゃねーぞ、と。

無言のアイコンタクトを見た店員が何を思ったのか  
「アイヤー、お密さんタチ、恋人同士カー。ナラ丁度いいネ、料理  
シバラク時間かかるカラ、ゆっくりスルヨロシ」  
とか言い出しやがった。

恋人オ？ おい、誰かこの店員の息の根を止めて黙らせる。誰  
でもいい、はやく。

おい、そこのオッサン。背中の戦斧でヤツの脳天をかち割つてくれ  
れ。くわつ。あからさまに皿返らしだぞこのオッサン。

つか周囲も、この子に同情の視線を集めのやめろ。オレは悪  
くないぞ。

てなことを考へてゐるうちに

「お、お久しぶりです。《死神》さん」と少女が沈黙を破った。

空気が変わるのがいいけど、やめ。 そのあだ名でオレを呼ぶのだけはやめて。

最近、 よりもく

『死神』と呼ばれてる（キリッ

の場面が夢に出なくなってきたんだから。

「一週間ぶりか？」

あの懐かしい場面からなー！

「はーい。 あのあと、 ちゃんと毎日訓練してるんです。 『死神』さんの助言じゅん

だから、 ほんとにその『死神』って呼ぶのやめて。 ……あ、 そ  
うか。 セウジヤーの子、 オレの名前知らなーいのか。

「トシアキ」

「え？」

「オレの名前はトシアキだ」

「えと、 ボクの名前はヒリーです」

えへへ、 と少女ははにかむ。 可愛い。

……じゃなくて、そういうことじやねーだろ。

バカなの?  
アホなの?  
アホの子なの?

このまま、「(1)趣味は?」とか聞く流れみたいになつてゐるぢやねーか。

「う、 そうか…。 ではなくてだな。 なんだ。 … 訓練は上手くいつて るのか?」

「はいっ。カリーナさんに魔法を教わっているところで、簡単な魔法なら使えるようになつたんです。えつと、カリーナさんつてのは「アマゾネス」ってグループの魔術師で、ボクは一ヶ月後「アマゾネス」にお世話になることになつていて。それは『死神』さんの助言に従つたんですけど。それで、ああえつと、クーネさんと『死神』さんは仲が悪いんでしたつ。あ、そのクーネさんつてのは「アマゾネス」のリーダーで。そういうえばリーダーからは絶対に『死神』さんには近づくなつて」

## 少女の怒濤のトーグ。

## 「落ち着け」

オレは少女を諫めた。

「……」  
「どうか、この子また『死神』つていったよね？」  
「しかも二回。」  
「オレちゃんと名乗ったのにね。」

しかし、「アマゾネス」のリーダーねえ。

そういうや会うたびに「あんたなんて怖くないんだからねっ」てな  
感じで挑発してくる黒髪ロングの女がいたな、アイツか。一向に  
テレる気配はなかつたが、照れ隠しであるというわざかな可能性が、

今完全に消えたな。

とか考へてこると、

「「「めんなさい、緊張しちゃった。」」」やつて対面してると何だか照れますね」

とか言こ出す。

ほんと何言つてるの？

「おー、やこの水はこんでる『走』。なんか変な空氣になつてるや。お前のせいだからな。あと早く飯もつてこご。」

「それにしても、飯まだかな。君もオレと間に一緒にいるのはまずいだろ。オレも信用するなと言つた手前、長々と話すところのも…」

「あー。そのことなんですか？」

必ず必ずと少女は口を開く。

「保留つてことでいいですか、信用するなつて？」

「は？」

思つていたことがそのまま口に出てしまつた。

「えつと、助言してもうらつたし。右も左もわからぬ状態で助けてもらつたといつか…。『死神』さんのことよく知らないのに悪く言つのも、おかしこと思つますし。あ、やつだ…」

信用するな、つてのを信用しないつて」とドビドビしちゃう。

開いた口がふさがらない。

何この子上手にこと言つたみたいな顔してるの。

アホの子だ。 完全に今オレの中で第一級アホの子認定が済んだぞ、おい。

肉、肉、野菜、油、野菜、肉、油、肉、肉。

底がみえない。

オレはなぜか、日替わり定食ではなく、この定食屋で最強と名高い『スペシャル丼』に挑んでいた。

圧倒的な量の暴力に、心が折れかけている。

迷宮街で最も過酷と呼ばれる戦いに挑んでいた。

「『死神』さん。もうそろそろ半分だよ！」

アホの子が何か言つてる。

元はといえばお前のせいだからな。

ボクもお腹いっぱいになつてきちゃつたー、とかいいながら涼しげな表情でオレの日替わり定食を食べているアホの子には目もくれず、オレはひたすら目の前の『スペシャル丼』という魔物との戦いに明け暮れる。限界の時は近い。

大体何があつたか想像は付くだろうが、事の発端は数分前にさかのぼる。

オレがこの目の前のアホの子に、「こんな定食屋、女の子が一人で来るような場所じゃないだろ？」と尋ねたところから、思い出すことにしよう。

「ボクができるだけ食費を浮かせたいって言つたら、カリーナさんが、いい場所があるよって。今日ボクは朝晩兼用でここに来てる

んです」

へへん、と自慢するようにアホの子は答えた。

一ヶ月無収入は厳しいんだろうなー、と他人事のように考えたオレは「そうだな。ここなら銅貨数枚でたらふく食えるからな」と返答する。

「そうみたいですねー、銀貨一枚でたくさん食べられるみたいで、『銀貨一枚の』って注文して」

「えつ」

「えつ」

話がかみ合わない。銀貨一枚……だと……確かに、普通の店で腹いっぱい食べるには銀貨一枚程度は軽くかかる場合が殆どだ。ただ、銅貨数枚で十分に吃えるこの定食屋で銀貨一枚といった額は、途方も無い大金に値する。そして、この定食屋でそんな大金に相当するメニューが、ただ一つだけ存在した。

その名も《スペシャル丼》。

五十人中四十人。

この定食屋で《スペシャル丼》を頼む探索者のうち、半分以上食べる前に力尽きる人数である。残る十人の内、九人はどんぶりの底を見ることなく、死亡もしくは引退し、完食者として定食屋の歴史に名を連ねるのは、一人がやつとだ。

どうみても、五十人中の四十人に入りそなアホの子が目の前にいた。

「だつて、カリーナさんが、銀貨一枚あれば食べるのには困らないつて……言つて……た……」

アホの子は言い終わる前に、事の重大さに気づいたようだ。それもそのはず、目の前の店員が例のモノを運んでこようとしていた。

病的なまでに膨張した容器に、名状しがたき肉と野菜が冒涜的な量入つてある忌まわしき丼。

目の前の少女は慄然たる思いで地獄の死者たる店員が持つその異形の物体を凝視し、青白い狂氣じみた顔で宇宙的な深淵に晒されることを理解しようとしていた。

アホのこが、なみだめでこいつらをみている  
助けますか >はい  
いいえ

オレのと交換してやるつか？

この一言を今オレは激しく後悔していた。

「そもそも……、君に勧めた奴は……なぜここに……いない……」

息も絶え絶えに、アホの子に尋ねる。  
何か喋つていないと、思考が肉と野菜と油に覆われかねなかつた。

「ええっと、「アマゾネス」のみんなは昼から迷宮にいってるんですけど。朝はボクのトレーニングに付き合つてもらつて、昼から別行動なので……つて大丈夫ですか？ 顔色が……」

上目づかいでオレを見る。 そういう顔はちょっと卑怯だろ。

「まだ……まだだ……、まだいけ……ぐふう」

〔圧倒的な量の暴力によつて、迷宮街屈指の探索者の命が、今死きた。〕

現実は非情だ。

「あわわわわ、えつと水を、『死神』さん、これ水ですっ」

田の前が真つ暗になる。『死神』 ああああん、と叫ぶ声が聞こえたような気がした。

「どう、オレの心象風景はともかく、案の定といつかなんと言つが、オレは『スペシャル丼』を食べきれるわけもなく、丼の半分を胃に入れた頃にギブアップした。勿論、実際のやりとりが、もつと淡々と行われたのは言つまでもない。 現実の認識が過剰になつてしまつたのも、ひとえに『スペシャル丼』の量の暴力のせいであつ。

「すみませんっ、『死神』さんに迷惑をかけてしまつて」

「ああ、いいよ。おかげで一杯食えたしな  
しばりくせ、食い物を見たくないけど。

「あ、そうだ。お金、私が全部払いますから。せめてものお詫び  
に」

「いや、食べた量的にはオレのほうが多く払うべきなんじや  
……」

「いえいえ、いりません。ホント迷惑かけちゃって

「いやこーザ」

「いえいえ」

ところが取りが数度あつた後、結局少女に押し切られてしまつ  
た。

「じゃあいりしましょ。今日は迷惑代もあわせてボクが全部払う  
ので、次の機会は《死神》さんが払ってくれださ」  
なぜか、少女の頭の中では次の機会があることになつていた。  
気にしたら負けだと思ったので、触れないでおこう。

「ああ」

「今日は楽しかつたです。また一緒に食事しましょ」

食堂を出で、それじゃあ、と別れをつげる。  
少女もオレに続く。

「そうですか。ボクもトレーニングに戻りますね」

ああ、と小さく頷く。

「そうだ。いつか、ボクの訓練の成果を見てくれるというやうです」

そういえば、一週間前からトレーニング場に近づかないようにしていたことを思い出す。普段通りの生活をしていたら、少女とトレーニング場で会うこともあるだろ？

「わかった、またな」と踵を返し、オレは逃げるよ<sup>うに</sup>人<sup>げ</sup>みにまぎれる。

街に線香の匂いはもうなかった。

「アマゾネス」のリーダー、クーネ。  
故郷はガイリア半島の小国【フェイタン】。

武と重んじる国家の、剣術道場の一人娘として生まれた彼女は、多くの門下生と両親、特に師匠である父親に限りない愛情を注がれ、すくすくと育っていた。十五になる頃には、彼女は自分の容姿が端麗で、また愛情を受けてそだつたことによる活発さから、周囲の男性から言い寄られており、自分はもてる側の人間なのだとという意識をもつようになる。彼女は厳格であるが優しい父の姿を知っていた。ゆえに、どうしても周りの言い寄ってくる男たちが頼りなく、物足りないと感じていた。飽食状態でいつでも可能な恋愛には彼女はそれほど興味を持たず、ただ父の背中を追いかけ、修行に励む毎日を過ごしていた。

北の村が山賊に襲われた、という噂を聞いたのは、十八の冬のことであった。国内で有数の剣術道場であつた彼女の実家からは、師範である父と実力のある門下生たちによる討伐隊が組まれることとなつた。実力という点では彼女は討伐隊に参加するのに申し分はなかつたが、討伐者という名の人殺しの名を十八の娘に背負わせるのを厭つた彼女の父親は、彼女を道場に残すこととした。その判断が、正しかつたことを父は死の直前に理解することとなる。

全滅、という事実が確定したのは、討伐隊が出発してから三日後のことだった。全滅の事実は、剣術道場のある城下街が、侵略者の手によって火の海に包まれることで判明することとなつた。全滅の原因是、討伐隊が大きな勘違いをしていたことにある。

そもそも戦っていたのは、数十名の山賊ではなく、千人の組織された兵隊であった。整列した千の重装歩兵による槍の突撃に対しては、研鑽された剣の腕も役には立たず、ただ一方的に潰された。

侵略者の群れが城下街に姿を現した頃、彼女の母はクーネを剣術道場の地下にある石畳の空間へと連れてゆき、ここに身を隠すようにと諭した。身体がほとんど動かせない狭い空間で、無限にも感じる長い時間を彼女は震えながら過ごす。

悲鳴と狂騒が止んで、彼女が外に出て初めて見たものは、変わり果てた母の亡骸であった。母親の服とその下の皮膚はびりびりに切り刻まれており、腹部と首筋は赤く染まっていた。そして、母のありとあらゆる穴が、犯されていた。

体中のすべての水分を吐瀉しながら、彼女は街を徘徊した。そこらじゅうに置かれている白くぶよぶよとした物体が、元人間だと気づくのに時間はかからなかつた。そして、全ての若い女だった物に犯された痕跡があるのを見つけるにつれて、一人生き残つてしまつたという絶望が、男という愚かな生き物に対する怒りに変わつていった。

しばらくして、城下街の一角で、彼女は自分よりも若い少年が死姦を行つているのを発見する。彼女は、少年が街の生き残りか侵略者の残党かを判断する前に、近くに落ちていた折れた剣を少年の喉元に突き立てた。愛情を受けて育つた彼女にとって、初めて人を殺める経験であった。

半月後、寄る術を持たないクーネは、迷宮街で生活することとなる。彼女は男を蔑み、憎み、そして恐れていた。彼女が女性だけのパーティを結成したのは当然の成り行きであった。

彼女は特に美しい女性とパーティを組むのを好み、そして下卑た男性探索者から、仲間の身の安全を守ることを最優先に行動した。

その行き過ぎとも言える庇護から、一度組んだパーティと決別することもしばしばあったが、身体の純潔を守りたいと考える女性探索者にとって、長年の鍛錬による剣の腕を持つクーネは最も頼りになる存在となる。

迷宮街に身を寄せてから半年が立つ頃には、清らかで麗しい女性集団のグループが彼女を中心にできあがっていた。迷宮街の人々は、神話になぞらえて、麗しい女性だけの部族を意味する「アマゾネス」の名を彼女のグループに与えることとなる。

そんなクーネの、今一番の懸念は《死神》の存在であった。

彼女が《死神》の存在を知ったのは、今は「きパーティの一員、ナナを勧誘したときだつた。

ナナは存在感すらあやふやな儂げな美少女であった。出会った瞬間クーネの庇護欲が揺られ、パーティに誘うに至つたのは当然の流れだつた。

そんなナナが、クーネに誘われて最初につぶやいた言葉が、「私はたぶん探索者に向いてないんだと思います」であった。詳しく聞くと、ある男が彼女に、探索者になつても一月も生きられない、

と言つたといつてはだつた。

「Jの事実にクーネは激しく混乱した。

クーネが知つてゐる男性探索者の像は、何も分からぬ女性をパーティに誘つて無理やり手籠めにするか、騙して性奴隸として売り払うといった類のものである。

よつて、クーネにはナナに死刑宣告をした男の意図がまるで理解できなかつた。

しばらく考え続け、苦し紛れにクーネは、男が一月以内にナナを襲うという宣言をした、と理解した。

それから一月の間、クーネはナナの付近を見回り、男の接近に神経を張り巡らせた。

しかし、男の気配は全くなかつた。

事が起きたのは、死刑宣告の一月が終わる日のことだつた。クーネはいつも以上に周囲に神経を尖らせて男の襲撃に備えていた。迷宮にもぐる際、クーネは男が襲つて来るはずの前方と後方に全注意を向けた。

そんなクーネがふとナナの行為を見逃したのは、仕方の無いことだつたのかもしれない。ナナは魔物が残したと思われる初步的な毒針の罠に、自ら飛び込んでいた。

数多くの死に触れてきたクーネにとつても、ナナの死は衝撃的な出来事であった。

そして、単に死の予言だけを行つた男『死神』に対して心底怯えた。

今までのクーネにとつて、男というものはある意味で分かりやす

く、そのあまりに分かりやすい悪意に恐怖するだけだった。

その分かりやすさが《死神》には通用しない。それが恐ろしい。いつしか《死神》のことが理解できない、が、《死神》のことを知りたいに変わつていった。

彼女は《死神》に出会う度に、彼女が思いつく限りの悪意をもつた挑発を行つた。

クーネは《死神》が、反発という分かりやすさを表現してくれることを期待した。しかし、《死神》は所在ないうように笑うだけであつた。

どんどん《死神》に対する混乱が広がつていった。

そんな中、第一のナナともいつべき少女が自分のパーティに加わることとなつた。

ナナと同じように、《死神》に死刑宣告された少女、エリーである。

エリーは、パーティに加わるや否や、《死神》のことを信頼するような素振りを見せた。《死神》の助言に従いたい、とエリーは言った。

《死神》を理解したいという気持ちが強かつたクーネは、すぐにこの申し出を受け取つた。もし《死神》の助言に従つたらどうなるかに興味があつた。

午前はエリーを特訓し、午後はエリーを抜いたパーティで迷宮にもぐり、夕方エリーと合流する。そんな毎日を過ごしていたある

日、迷宮から戻ると、訓練に取り組むエリーのそばには《死神》がいた。

まるで、エリーを見守るように立っていた《死神》の目には、クーンは既視感を覚えた。

自らの二十年間の人生を必死に思い出そうとする。

しばらく考えて、ようやく《死神》に対する混乱の理由が判明した。

あの日は、討伐隊に参加するのを是としない、慈愛に満ちた父の日と同じだ、と。

8 アマゾネスの女（後書き）

みやげへ、書きたかった内容へと少しずつ近づいています

オレが迷宮帰りにトレーニング場に寄つて、アホの子エリーの魔法の練習をぼーっとみるのが日課になって、幾日か経つたある日のこと。まあ、ぼーっとみる、といつても、自分のトレーニングを行なながら、だけど。

よーし、と少女は氣合を入れて、前を向いて呪文を唱える。

『ヘテラ、汝を覆い隠せ!』

エリーの前方にある、四尺はある藁人形の足元から『藁』が生え、藁人形の半分を覆い隠した。

「やつた、できましたっ、『死神』さん!」

オレは不安定な足場の上で、片足でバランスをとる訓練をしていたが、それでも返事くらいはできる。

「良かつたな。じゃあ次は腹筋と腕立てを三十回やつた直後に、もう一回だ」

オレは口でエリーに次の指示を出す。

「えー、成功したんだから、ちゃんと褒めてくださいよ。言われたとおりやりますけど……」

「疲れて集中が切れてるときに成功させてから、はじめて成功したと言え。褒めるのはその後だ」

むー、と言いながら、ヒリーは腹筋に取り組む。しかし、表情が「口口口」と変わるヤツだな。

ちなみにこの特訓メニューはオレが考案した独自のメニューである。

魔法が本当に必要な状況は平時ではない。迷宮を駆けずり回つて、くたくたになつたときにこそ魔法は必要になるのだ。

よつて、その状況を擬似的に作り出すのがこの特訓の主題である。それに加えて、魔法使いであつても、基礎筋力がある程度無くては話にならない、というのがオレの持論だつた。

一人で全てのことをやらざるを得ないオレだからこそ出る発想で、迷宮探索者の一般的な常識とはずれているかもしけんが。

「それにしても……くつ……『死神』さんの教えてくれる……くつ……魔法つて……独特ですよ……ねつ」

腹筋しながら、アホの子エリーは問いかける。もう息が上がつてゐるのか、体力ねえなあ、おい。

「この『薦』の魔法は前衛無しで戦う為に覚えたものだからな。確かに前衛一の六人パーティなら、足止めなんぞ有り難みは薄いかもしだ。ま、覚えておけば前衛が倒れても、君は死なずに逃げれるかもしだぞ」

搦め手を可能な限り用意する。これが迷宮で生き残る口ツだ、とオレは考へている。

腹筋と腕立てを終えた少女は、はあはあと肩で息をしながら、立ち上がる。

「つ……フューテラ、なんじをつ、覆い隠せつー。」

「はい、残念」

藁人形に変化はない。唱えた魔法は失敗だった。

魔法を唱えるのに必要なのは集中力と『呪文』の発音と言われている。今回はどうちも足らなかつたらしい。

ちなみにここでの『呪文』とは、今回の場合、『ベーテラ』、の部分だけを指す。あとの部分は主に集中力を高める為の補助部分なので発音はそこまで重要じやない。また補助部分は唱える人によって異なることが多く、ある意味では『呪文』に何となくそれっぽい文章を付け足しているとも言える。ただ千差万別の補助部分にも、ある程度の文法の制限があるらしくて、大体、我、だとか、汝、だとかのあとに命令系がくることが多い。

ついでに言うと、探索者は補助部分を唱えないと魔法が発動しないが、迷宮の怪物は何故か補助部分なしで魔法を唱えることが可能である。つまり、怪物との魔法戦では、補助部分の詠唱時間分探索者のほうが不利つてことになるな。

悔しそうな顔をしているエリーを横目に、オレは懐中時計を見る。少女のグループ「アマゾネス」が迷宮から戻つてくる前に、オレは退散することに決めていた。

退散せねばならない理由は一つある。

一つ、部外者なのに、余計な魔法や訓練法を教えている現状が後ろめたい。

「一つ、そもそもオレは「アマゾネス」のリーダーにひびく嫌われてこりしー。

とりあえず、「アマゾネス」に歓迎されないことだけは確かだろ。ところど、「あと三セツトナ」とメーヨーを少女に与えて、撤退の準備をする。む、無理だよお、とか聞こえた気がしたが氣のせいだら。

などと考えていたが、

「あーっ！『死神』がこんなところのよーっ！… クーネさん、みてみてっ！…」

とテカイ声が辺り一体に響き渡った。しまった、撤退が遅過ぎたか、と思つても後の祭り。

「む、本當か… じこじこ」  
と黒髪の女が答え、  
「そこだよっそこー！」  
と騒がしい女がオレを指差す。

オレのことを嫌つているらしく黒髪の女が、無言で近づいてきた。逃げられないそうにない。

どうしたものかな、と考えたが、近づいた黒髪の女はオレを無言

で見つめるだけ。 しばらくして、フツ、と嘲笑したかと思つとう言い放つた。

しばらくして、フツ、と嘲笑したかと思つとい

「『死神』殿、模擬戦を申し込む。私の訓練に付き合つていただけないだろつか」

すみません。 どういづ流れなのか、全く読めないです。

## 10 フードの下（前書き）

風邪で体調が優れないのでも、しばらく更新ペースは下がります

よりにもよって、『死神』を見て父上のことを思い出しありが  
なんて。

クーネは、訓練用の木刀を選びながら気持ちを整理していた。

不覚にも、『死神』の田が、父上の田と似てていると認識してしまつてから、私の中で言葉に出来ない気持ちが爆発しそうになつてゐる。こんなこと、迷宮街に来て以来、いや故郷が滅ぼされて以来初めての経験だつた。忘れていた記憶、強い父上への尊敬、男性のたくましさへの憧れ。男への嫌悪感と同時に存在してはいけない気持ちが、『死神』によつて掘り起こされようとしている。

でも、この立ち会いで否定すればいいだけのこと

クーネの、父に対する最も強い記憶は、剣の立ち会いにおける圧倒的な強さだつた。ゆえに『死神』に勝負を挑んだのも、『死神』が父とは異なることを確認したいがための行動であつた。

『死神』が父上の様に強く優しい存在であつていいはずがない。『死神』を見て、湧き上がる感情が、尊敬や親愛といった類である、という疑念を払拭したい。

その為の、模擬戦。

私は武器の選択を終え、闘技場へと足を運ぶ。闘技場には、既

に「アマゾネス」のメンバーが集まっていた。

「頑張つて下さいねークーネさん…」と、「アマゾネス」のムードメーカー、ライムが声援をおくる。相変わらず元気だな、と心の中で微笑む。

どうやら《死神》は武器の選定に手間取っている様で、なかなか闘技場に現れない。

ファラとシンディは、ヒリーを囲み、《死神》とヒリーの関係について盛り上がっている。女三人で姦しいとは上手いことをいうものだと思つ。

そして、そんな盛り上がりとは一線を隠す様に、一人ぽつんとカリーナが闘技場の床に座り込んでいた。

勘の鋭い無口な私の親友、カリーナは私の意図に気付いているのだろうか、と考える。私の視線に気付いたのか、あの子は軽く微笑んだ。まるで微笑ましいものを見るかのように。あの子は私の過去を知っている。私が男を極度に侮蔑していることを知つている。そして知つていながら、何も言わない。

《死神》を見たときに私が抱いた感情も、あの子にはお見通しなのかもしれない。

そして、それが望ましい変化だと考えているのかもしれない。

それでも。それでも私は、この感情を否定してみせる。

そうやって「アマゾネス」のメンバーを見ながら決意を新たにしてみると、ようやく《死神》が武器選びを終えたようで、闘技場に

姿を現した。

「時間かけてすまんな、長いのが見つからなくてな」

そう言つ『死神』の手には長さ七尺ほどもある木刀があった。私が持つてゐる木刀のおよそ二倍の長さ。充分すぎるほど長いのに、『死神』は不満げにしている。

「しかし、本当にやるのか？ こんな棒つきれども大怪我するかもしれんぞ」

『死神』は私に尋ねる。

「随分な自信だな」

「いや、女の子を痛めつけるのは好みじゃないといつが……」

女の子、だと。

私は、『死神』を睨みつける。

私は、負けない。

「ああ……わかつたよ。戦えばいいんだる。……戦つときには邪魔か……」

ぶつくさと言いながら、『死神』はロープについたフードを外す。

そこには透き通るような金色の髪。

美丈夫といつて差し支えない顔立ち。

そして頭の側面に、骨まで達するかとも思われる深い傷があり、その周辺の細胞、毛根に至るまで死滅している。一目見て致命傷にも思えるグロテスクな傷跡が、全体の調和を著しく損なつていていた。

10 フードのアート(後書き)

金髪イケメン(ハゲ)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9037z/>

---

迷宮街の死神

2012年1月5日18時49分発行